

「伊勢物語哥之注 月樵筆」の成立と性格

藤川 晶子

はじめに

「伊勢物語哥之注」(以下「哥之注」と略称する)とは、後述するように室町中後期に成ったと思われる、伊勢物語中の和歌すべてを対象に施された、和歌のみの注釈である。そして、今回とり上げる片桐洋一先生所蔵本は、成立年時に近い写しであり、注目されるべき一本である。まず、以下にその書誌を紹介しておく。

当該本は縦二六・二種、横一七・四種の四半型の冊子本を、上巻二巻の卷子本に仕立て直したものであり、上巻には初段から六六段、下巻には六七段から一二五段までの歌注がなされている。料紙は楮紙。二巻を入れる古い桐箱の蓋に「伊勢物語哥之注 月樵筆」とあるが、外題、内題共に存しない。また、朝倉道順の極札に「月樵法師筆」とある。この月樵については、「慶安手鑑」所収、伊勢物語六七段の断簡の筆者に「牡丹花門弟 月樵」として見られ、室町後

期における堺の連歌師であったようであるが、詳しい伝記は明らかではない。その他、月樵を伝称筆者とするものとしては、徳川美術館蔵手鑑「菑叢」所収新古今集切、同じく「玉海」所収雅親集切、手鑑「諫早」所収和漢朗詠集切などに加え、色紙、短冊の類も散見される。¹⁾

なお、大津有一氏が、その著書「伊勢物語古註釈の研究・増訂版」において、「歌のみの注釈」として「哥之注」と同一系統の伝本である、島原公民館松平文庫(以下「島原松平文庫」と略称する)蔵「伊勢物語聞書抄」の存在を指摘されている。この本は、奥に「天文廿年辛亥五月廿五日書之畢」とあるが、その江戸初期の転写本である。「哥之注」と内容的に大きな相違は見られないようだが、大津氏は前掲書において、当該本の性質は明らかにされていない。

そこで本稿では「哥之注」を用いて、その成立と性格を明らかにすると共に、伊勢物語享受史における「和歌のみの注釈」の存在意

義についても言及していく所存である。

一、和歌知願集との関係

既に片桐洋一先生「伊勢物語の研究・研究篇」において、「哥之注」が知願集系統の中でも特に、書陵部本系知願集に近く、その末書とされるべきことが指摘されている。そこでまず、「哥之注」が言辭ともに書陵部本系知願集に酷似している代表的な例を掲げ、その様相を改めて確認しておきたい。

一二段「むさし野はけふはなやきそわかくさのつまもこもれり我もこもれり」の歌について、「哥之注」では、

このうた、ことなる事なし。つまとは、つねにはをんなをいへども、これはおとこなり。ひこぼしのつまむかへぶねを、たなばたのつまむかへぶねとよむがごとし。……

とある。これは、書陵部本系知願集に、

……ことなる事なし。つまとは男をいへり。つねには女をこそつまといふに、これは男をつまといふ。……(中略)……されば、ひこぼしのつまむかへぶねとこそいふを、又たなばたのつまむかへぶねともよめるは、この心なるべし。

とあるのに一致するのが知られる。同様に、一九段「あまぐものよ

そにも人のなりゆくかさすがにめにはみゆる物から」について、「哥之注」が、

あまぐもとは天のくもなり。よそになるといふたよりに天の字をよめり。おとこのたえたるをうらみてよめるなり。……

と注し、続く「あま雲のよそにのみしてふることはわかいる山の風はやみなり」について、

このあまぐもは雨雲なり。ふるといはんとてなり。……(中略)……かせはやみとは、又、おとこのあれば、すさまじきとなり。……

と注する部分が、書陵部本系知願集における、

あまぐもとは天の雲也。よそになるといふたよりのために、わざと天の字をよめる也。……(中略)……返しの哥のあまぐもは天の雲にはあらず。あめの字也。ふることは、といはんたよりのために、あめの雲をば、よめるなるべし。わがふるやまの風はやみとは、又、おとこのあれば、すさまじといふ事(也)。に酷似することも一見して明らかであろう。「哥之注」全体を通じて、このような例は多く、すべてを列挙しえないが、以上、僅かではあるが二例をもって確認したように、「哥之注」が原則として書陵部本系知願集に拠っていることは明白なのである。

が、しかし、ここで注意しておきたいのは、次のような例が存す

ることである。

一四段「夜もあけばきつにはめなでくだかけのまだきになきてせなをやりつる」について、

このうた、きつとは、きつねなり。あつまのならひに、いへをくだといふといへり。かけとは、にはとりなり。まだきとは、まだしきなり。せなとは、おとこなり。ちきるおとこことかきて、せなとよむなり。わかひへのはとり、きつねにくらはせん、まだ夜もあけぬになきて、せなをかへしたれば、といふなり。にはとりをは、きつねのこのみてくらう物なれば、かくよめり。これも、ふるきうたなり。

とある注釈は、確かにその内容、言辞ともども書陵部本系知頭集に酷似しているのに加え、「これも、ふるきうたなり」と、伊勢物語の歌すべてが業平をめぐる事蹟であるとは見ない姿勢も、知頭集系統のそれに通ずるものであることは言うまでもない。ところが、書陵部本系知頭集では、「きつ」を「きつね」とする解釈に加え、「又あるものには、みちのくにのならひとして、木船をきつとなづけたり。」として、「木船」説をも紹介しているのである。「きつ」をこのように「木の水槽」と解する説は、現在では一般的であるが、それは江戸時代、伴信友がその著書の中で平田篤胤説を紹介し、藤井高尚らがとり上げて以降、初めて普及するに至った説であって、そ

れを鎌倉時代に知頭集が示しているのは画期的であり、なおかつ顕著な特徴の一と言えるものである。にもかかわらず、それが「哥之注」において触れられていないのは、注目に値する。

また、「二三段」くらへこしふりわけがみもかたすぎぬ君ならずしてたれかあぐへき」について、「哥之注」は、

ふりわけかみとは、いまたさたかにもゆはぬほとのかみの、かほにか、りたるを、ふりわけて物をみたるほとのかみなり。おとは、たけくらへに我かちたりと、たはふれたれば、をんなは、又、あらしひしかみこそおひまさりたれと、たはふれたるなり。かみをあくとは、ふうふのけいやくをいふなり。もろこ

しには、をんなこむまれて七さいになるとし(中略)……かのをんなには、ぬしありと人にしらせんがためなり。……

と注しおく。これも書陵部本系知頭集に基づく内容ではあるが、書陵部本系知頭集では、この後さらに「白居易の楽府といふ文に……」といった、「本文」の紹介が加えられているのである。

その他にも、例えば一四段「中く／＼に恋にしなずはくはこにそなるへかりける玉のをはかり」について「哥之注」では、「これは、ふるきうた」とする部分が、書陵部本系知頭集において、「この哥は万葉に、よみ人しらずとあり。人丸の哥にや」と、その出典が「万葉」であると明記されていたり、二二段「わするらんとおもふ

心のうたかひにありしよりけに物そかなしき」について、「哥之注」が、「ありしよりけにとは、ありしよりすくれてかなしきとなり。

すくれてとは、まさることなり」としか注せぬ部分に、書陵部本系知願集では、「けにとは、まさにとふぎにはあらず。まさりてといふこと也。勝の字をかけり」と、「勝」という漢字を宛てての説明がなされているなどの点が注目される。ちなみに、「哥之注」では、「ふしやうふめつとは、しやうせす、めつせすとなり」(三九段)や、「人の身には、地水火風あり。地水火風とは、つち・みつ・ひ・かせなり。されは、火風の二、めいかにきするなりといへり。めいかにきするとは、めいどにかへることなり。」(四五段)などのように、漢語を和らげる釈は見られるが、漢字を宛てての説明がなされることはないのである。

こうしてみると、「哥之注」が書陵部本系知願集に拠っていることは明らかである一方で、より詳細な和歌の内容の検討や、諸説に對する跡づけをすると共に、その秘伝性を高めんがための、他説や本文・本説の紹介、及び、和歌の典表示や漢字を宛てての説明などがなされぬ傾向にあると言えそうである。すなわち、この「哥之注」は、書陵部本系知願集を主材料にしながらも、基礎的かつ平易で親しみやすい注釈を施すことを主眼に成立したもので——つまり、和歌の初心者、未だ知識の浅い者を対象に作られたものではないか

と考えられるのである。

二、和歌知願集で触れられていない部分について

(一)、冷泉家流伊勢物語抄との関係

和歌知願集には、書陵部本系統、鳥原松平文庫本系統共に、注釈の現存しない段が見られる。それは知願集後半になるに従って数が増してゆく傾向にあるようだが、そのような章段の歌について、「哥之注」がどのような注釈を施しているのであろうか。以下に検討してみたい。

概して、知願集阿系統に注釈の存せぬ段については、その内容が簡略かつ平易であり、敢えて釈する必要の感じられない場合が多い。しかし、そのような章段に含まれる歌に對しても、「哥之注」においては、以下に述べるごとく、そのすべてに丁寧な、基本的事項を押さえた注釈がされているのは、前述したように、「哥之注」が、和歌の初心者を対象とする性質を持つことに由来すると思われる。

ところで、ここで指摘しておきたい点は、前述のように、本文・本説の類はとり入れない傾向にある「哥之注」が、僅かながらも、

それらを紹介している例が存することであり、その殆どが、知頭集では注釈の存せぬ段のものであるという事実である。

まず、「哥之注」が「ほんもん」として掲げる例を見てみたい。

五〇段「とりのこをとをつ、とをはかさぬともおもはぬ人をおもふ物かは」について、

このうたの心は、ほんもんに、ち、は、のをんの、ほこしかたきことをいへるたとへにいふ。とりのかいこをかさねあけんことは、かさねかたきことなれとも、それをは、かさぬるとも、おやのをんをは、ほこしかたきよいへり。それをとりて、このうたはよむなり。とりのこのかさねかたきはかさぬるともと、たとへてよめり。……

とある。これは「説苑」などの漢籍に見える、中国における累卵の故事である。また、同じ五〇段「ふくかせにこそそのさくらはちらすともあなたのみがた人のこ、ろは」について、

このうたは、ほんもんに「たとえふるきとしの花はこすゑにのこりてのちの春をまつとも、たのみかたきは人の心なり」といふなり。これによりて、かくよめり。……

と注するが、これは「白氏文集」に「縦ヒ旧年ノ花枝ニ残リテノ春ヲ待ツトモ、頼ミガタキハ是レ人ノ心ナリ」とある部分にあたる。しかし、「哥之注」が直接、これらの出典にあたっていたとは

考え難く、また、知頭集両系統にも五〇段の注釈は存しない。ところが、ここで注目されるのは、冷泉家流伊勢物語抄に、ほぼ同内容の本文が引用されていることである。以下、その該当部分を引用する。

哥に、鳥の子を十づ、十はかさぬともとは、ちんこうがほうおんきの心也。其記云、徳至徳父母徳、恩至恩師与恩。縦持吟子空上百数百重其徳難報、縦索泥牛水中千渡千人乘其恩難謝と云也。……(中略)……されば、思はぬ人を思ふは、かたき事也といふ也。……(中略)……吹風にの哥は、文集云、縦舊年之花残梢待後春、難契是方人之意といへり。……

このように、「哥之注」引用の「ほんもん」が、相方共、冷泉家流伊勢物語抄に見えるのは疑いない。

また、一〇八段「よひごとにかはづのあまたなく田にはみつこそまされあめはふらねど」について、「哥之注」では、

……うたの心は「花はかせによつてちり、みつはかはつたのなくにまさる」といふほんもんあり。……

と注するが、この歌についても、書陵部本系知頭集に注釈が存せず、島原松平文庫本系知頭集において、「詩にも哥にも、かはづの声を、みつにはたとへてよめり」とあるが、「哥之注」にあるような「ほんもん」には触れない。そしてやはり、冷泉家流伊勢物語抄におい

ては、「順が西行の賦云、花依風散、水増蛙氣、人依友知情、雨依雲（知）降云々。」として、同内容の本文引用が見られるのである。

続いて、「哥之注」が説話を引用して注釈を施している例をとり上げておきたい。

まず、二五段「あきの野にさ、わけしあさの袖よりもあはてこし夜そひちまさりける」について、「哥之注」では、

……又、むかし、恋ゆへに、つゆふかき野をわけし人あり。これは、しのおにあまるなみたのかなしさに、露にぬれたるよしをいはんとて、野をわけしなり。それを、さ、わけのちうしやうといひけるとなり。……

との説話を引くが、古注では冷泉家流伊勢物語抄にのみ、「本説をおもひて読るなり」として、「大和物語」に云、桜田中将とし名といふ人、……と、同内容が記されていることが知られる。なお、旧注では、愚見抄にのみ「此歌、中将のよめる也」とあるが、説話内容には触れない。また、毘沙門堂旧蔵古今集注にも「此ハ大和物語ノコトヲ引テヨメル也。……」と見える。愚見抄の記述ともども、冷泉家流伊勢物語抄の影響下にあるものと考えてよいであろう。

また、三七段「我ならでしたひもとくなあさかほのゆふかけまたぬ花にはありとも」について、「哥之注」が、

したひもの事、むかし、えんがうばうといふ人あり。ひじんを

つまとせり。かれを、かんのめいてい、女御にめさる。せんしなりければ、ちからなく、すてにりべつす。そのとき、そてをひかへていふ。「われ、なんちにわかれなは、七日をすくへからす。かならずしすへし。このおひをはだにして、うまのときことに、なんでんに出てゐに、われ、みなみのかせとなりて、なんちをふかんに、このおひとけは、わかあふとおもへ」とて、手のかはをはきて、おひにつゝみて、をんなにあたへたり。やくそくのまゝにありといへり。……

との説話を引用する。知顯集両系統に、この段の注釈は存せず、古注では、やはり冷泉家流伊勢物語抄にのみ、「下ひもを契といふ事は、本説、若紫のすり衣の所にあり」と注しおいており、初段の注において、「又、大國に……」として、「哥之注」と同様の説話が見られるのである。そしてまた、毘沙門堂旧蔵古今集注に、「文集日、……」とする類似内容が見出されるが、これも冷泉家流伊勢物語抄に基づくものと判断される。

さらに、一一〇段「おもひあまりいてにし玉のあるならん夜ふかくみえは玉むすひせよ」について、「哥之注」が次のような習俗を引用していることも知られる。

……このうたの心は、人のたましい、とぶとき、はくまいを七つほ、ころものしたがへのつまにつゝみて、ひだりの手にてむ

すひて、玉はとぶぬしはたれともしらねどもむすひと、めよ
したがへのつまといふうたを、三へんよむへしとなり。されは、
わかたましい、そなたにみえは、むすひと、め給へといふなり。
……

この段について、やはり知顯集兩系統に注釈は存せず、古注では
冷泉家流伊勢物語抄にのみ「陰陽家の招魂祭に……」として、類似
内容が掲出されているのである。なお、旧注においても、「昔より
いひつたへ」（愚見抄）、「まじなひ」（肖聞抄、宗長聞書）など、
冷泉家流伊勢物語抄の影響が見られる。また、既に袋草紙において
も、この習俗に触れていることが知られるのであるが、ここでは前
掲二例と同じく、冷泉家流伊勢物語抄の存在に留意しておきたいの
である。

最後に二二二段の例を挙げておく。「山しろのあでの玉みつ手に
むすひたのみしかひもなき世なりけり」について、「哥之注」が橘
諸兄の説話を引用する部分である。

……このうたの心は、たちばなのもうえといふ人、井て寺をたて、
ある井をほる。もろえ身まかりぬるとき、「われ、かならず、
この井にかけをうつすへし、みんなとおもはんときは、この井を
みるへし」とありければ、その、ち、ゆきてみるに、さらにお
もかけなし。それより、たのみしかひもなきことにより。……

この歌について知顯集兩系統では、「水を手にくむ」ことから
「たのむ」の語が成った、と釈するのみで、「哥之注」のような説話
は引用しない。そして古注ではやはり、冷泉家流伊勢物語抄のみが、
「日本記云」として、ほぼ同内容の説話を引いているのである。な
お、旧注では、肖聞抄、宗長聞書などが「下帯の物語」なるものを
掲げるが、「哥之注」所引説話とは内容的に相違する。「哥之注」の
引く説話は、井手に諸兄の別荘があったことから生じたものかと思
われるが、ここにも、冷泉家流伊勢物語抄との関係が看取されるの
である。

冷泉家流伊勢物語抄には、本文・本説の引用が多くなされている
のは周知のところであるが、以上に見てきたように、知顯集で触れ
られていない章段の歌注を中心として、「哥之注」が本文・本説の
類を、当時なお盛行していたであろう冷泉家流伊勢物語抄から撰取
していた様相が具さに窺われる。そしてそれは、本文・本説の引用
以外においても、例えば、知顯集では言及されない人物名を明示す
る際などにも見られる傾向なのである。

すなわち、「哥之注」が、前述のように和歌の初心者に対して、
その興味を引き、知識欲を満たす目的のもとに、知顯集の説だけで
は不十分であると判断される点や、一般的常識、教養の範囲で知っ
ておくべき点については、本文・本説をはじめとして、冷泉家流伊

勢物語抄の説を適宜参照し、とり入れていたのではないか。そして、人物名を冷泉家流伊勢物語抄によって補っている事実も、全く同様のことに起因すると思われるのである。

(二) その他「哥之注」の特色

今迄、「哥之注」が和歌の初心者を対象に説かれたものである可能性を述べてきたが、この「哥之注」には、女性を対象として成っていることを暗示する注釈が存することも見逃せない。

六一段「名にしおはゞあだにそあるへきたはれしまなみのぬれぎぬきるといふなり」について、次のような注釈がなされているのに気付く。

……このをんな、まことにあなかなれば、いやしくて、名などもなし。されと、こさかしくいろをおもひ、なさけをしりたるによりて、かゝる物かたりにかきと、めて、をよはぬ名を、とをくつたへたり。いはんや、人とひとしからん人の、色もあり、なさけもあらんは、やしまのほかまでも名をつたへん物そと、をんなの心をす、めんかためなるべし。

これは、六一段が「をんなの心をす、め」るために語られた章段であり、「人とひとしからん人の、色もあり、なさけもあ」る女性

——講説対象の女性を示すか——ならば、広く名を残さねばならぬ由を説く、啓発的言辭と言えるのである。

さらに、四九段「うらわかみねよげにみゆるわかくさを人のむすはんことをしそおもふ」の注では、

……うたの心は、うらわかみねよげにみゆるとは、かくのごとくうつくしければ、心もよからんといふ心なり。……

と釈し、「ねよげ」を「心もよからん」の意としていることが知られる。兄から妹に対する歌である故に、「寝よげ」とは解さぬ姿勢に、講説者の、若い女性に向けての教育的配慮が感じられるのである。ちなみに、知顕集両系統では、この段の注は存せぬが、冷泉家流伊勢物語抄をはじめ、旧注においても、「草の根のよきを、人とねてよきとそへたる」(愚見抄)、「寝と根とをかねていへる」(肖聞抄)、「根と寝とをかさねて心得べし」(宗長聞書)など、「寝よげ」の解釈が、一般的に通行していると言つてよいであろう。

このような点から考えると、「哥之注」は、ある程度以上の身分の若い女性——例えば、大名の姫君など——を対象に施された注釈である蓋然性が生じてくるのである。

一方、「哥之注」の講説者側の見識を示す部分も存する。

例えば、一一一段「わするなよほとは雲むになりぬとも空ゆく月のめぐりあふまで」の注に、

……このうた、しうゐしうに入たり。たちはなのためもとどあり。
この伊勢物かたりを、いつのころのこととも、人にしらせじ
がために、なりひらのことにてもなき事ともを、かきまじへた
ることおほきなり。

とある。「哥之注」が、その大半を書陵部本系知頭集に基づくものであることは、繰り返し述べてきた通りである。そして今、掲げた部分も、「大半は業平の実伝であるが、部分的に、ふるきものがたり、や、伊勢が書き入れた十六段、など、業平以外の人物をめぐる章段が混入している」という、知頭集に特徴的な姿勢の延長線上にある考え方であることも確かであろう。しかし、「この伊勢物かたりを、いつのころのこととも、人にしらせじがために」とあるように、物語全体の舞台設定を業平の時代と限定しえないがために、業平以外の事蹟を書きまじえているのだという考え方は、すなわち、伊勢物語の一部ではなく、その全体の虚構化を指摘するものではないか。そして、このような考え方は、江戸時代以降において初めて一般化したものであり、「哥之注」成立当時としては、かなりの進歩的物語虚構論と言いうるのである。

また、九二段「あしへこくたなしをぶねいくそたひゆきかへるらんしる人もなみ」の注において、

……この物かたりのまへのことかきに、このおとは、ひとのく

により夜ことにきつ、ふゑをいとおもしろくふきて、こゑは
おかしうてそ、あはれにうたひけるときのことなり。かやうに、
この物かたりは、こんらんしてかきたり。

とあるのも、「哥之注」講説者が、伊勢物語全体の虚構化の方法を指摘する言辞の一と言えるのではないだろうか。

以上のように、「哥之注」の講説対象は和歌の初心者（若い女性か）であっても、その講説をなした人物自体は、かなり発展的な自論を持った知識人であったであろうことが推測されるのである。

ところで、この知識人たる講説者が、当時の一般に通行していた、一時代前の古注の説を用いていることは、初心者を対象とするがゆえであろうことは前述したが、しかし、その古注の説をとり入れず、当時における最先端の論とも言うべき旧注の説を受容している部分が見られることも事実なのである。

二四段「あら玉のとしのみとせをまちわひてた、こよひこそにまくらすれ」については、次のような注がなされている。

このうたの心、まことに新枕にいまくらしたるにあらず。とし月こざりけるをうらみて、いふよしなり。むかしは、ふうふの中をみとせまちけるなり。さてこそ、みとせをまちわひて、にまくらすれとはよみたれ。又、子のある中をば、四年よねまちけるとなり。……
繰り返し述べてきたように、「哥之注」が基本的に拠っていると

思われる、書陵部本系知願集では、この歌の注は存せず、比較しえないが、鳥原松平文庫本系知願集では、「新枕とは、はじめたる人にあふことをいふ」とあり、冷泉家流伊勢物語抄においても、それは同様である。また、愚見抄も「たゞ今夜こそ新枕すれとは、こと人にはじめてあはんとするをいふなり」と釈している。

ところが、肖聞抄では、「誠に新枕せんには、かやうにもいひがたし。只中将をうらみていへるにや」とあり、宗長聞書においても、「実に今夜新枕をするにはあらず。男をうらみていへるなるべし」のように、新枕の事実を否定するのである。ちなみに、さらに時代の下の闕疑抄においては、「業平を恨て、かくす所もなくよめる也。真実、新枕と可見也。」とあり、新枕の事実を肯定している。

こうしてみると、「哥之注」は、肖聞抄、宗長聞書あたりの説くところに基だ近い内容を撰取していることが知られるのである。

同様に、もう一例を挙げておく。

九三段「あふな〜おもひはすべしなぞへなきたかきいやしきく
るしかりけり」の歌注で、「あふな〜とは、まことに〜といふ
心なり。」と釈す部分である。書陵部本系知願集では、「名のあふ
たるとしぞ恋もすべかりける」とあり、鳥原松平文庫本系知願集に
おいても、「なのあひあふたるとしらす……」などと注しており、
知願集系統では、「あふな〜」を「名の合ふ」意と解している。

また、冷泉家流伊勢物語抄においては、「あなう〜」と釈してお
り、これも「哥之注」に異なる。しかし、愚見抄に至って、「げに
〜しくなどやうなる詞也。」なる解釈が現われ、肖聞抄において、
「ねん比なる心也。又、まことになど云心也。」と、「哥之注」に施
されるところを言辭を同じくする注釈が見られるのである。

なお、宗長聞書では、「ねん比なると云心也。又、大事なると云
心也。」とあり、肖聞抄などと同内容の釈が知られる。さらに、闕
疑抄に至っても、「念ごろなる心也。」という解釈は続くのである
が、しかし、「哥之注」の施す「まことに〜」なる注釈言辭から
考えるに、先の二四段の例に同じく、やはり、肖聞抄あたりとの近
似が思われるのである。すなわち、「哥之注」は、肖聞抄などとは
ほぼ同時代、つまり、室町中後期に成った書である蓋然性が高いの
ではないか。そして、その講説者は、当時における新説にも通じてい
た、かなりの知識人であったことが、ここからも窺われるのである。

むすび

以上、述べ来たったところを踏まえながら、ここで、「哥之注」の
性格を改めて確認し、「むすび」としたい。

「哥之注」の特徴的様相は、これまでに触れてきた通りであるが、

その他、全体を通じての特筆すべき点をまとめておく。

まず、第一点は、注釈における主軸が、「うたの心」の理解に存することである。すなわち、和歌の基礎的、鑑賞的理解を主眼としているのである。そのことは勿論、この「哥之注」が、当時の一般常識たる古注——中でも、書陵部本系知頭集——に基づき、伊勢物語におけるあらゆる人物關係を、その実名を挙げることで明示し、内容理解を助けていることにも通じるものである。

また、すべての歌注において、「この物かたりに……」「このことかきに……」などの形で、伊勢物語本文をそのまま、或いは適宜まとめて撰取し、伊勢物語歌の理解と同時に、伊勢物語全体の概括的内容をも把握することが可能にならしめている点も同様である。

加えて、書陵部本系知頭集などの古注において注釈がなされていないような平易な歌についても、「哥之注」では、そのすべてに丁寧な釈が施されており、特に、「むさしあふみとは、かけてといはんためのまくらことはなり」(二三段)や、「あつさゆみは、ひけとひかねともよるといはんとてなり。あつさによるといへはなり」(二四段)、「さいくうをみそめたりしを、みるめかるといふなり。……(中略)……みるめかるとは、あま人のわさなれば、たとへていふなり」(七〇段)などのように、知頭集などではとり上げられぬ類の、枕詞、縁語などの解説をも着実に加えてゆく姿勢は、やはり、

「哥之注」が若い女性などの和歌初心者を対象とする性質を持つものであることを示していると言えよう。

さらに、年代的に矛盾をきたすにかかわらず、「本哥」として、千載集(二四段)、新勅撰集(二五段)などの入集歌を掲げているのをはじめ、三代集をはじめとする勅撰集に入集の由を指摘する言辞が、まま見られることにも注目すべきであろう。「哥之注」の講説者が、三代集をはじめとする勅撰集入集歌を、必須の教養としてみなす態度の表れではないかと思われるからである。

ところで、伊勢物語の和歌のみの注釈としては、他に、宗祇の「伊勢物語山口記」や、「哥之注」に同じく、知頭集の影響の顕著な「神風知頭正義集」(現存は下巻のみ)などが存する。勿論、各々、成立年代や事情、背景などが異なるため、単純比較は出来ない。しかし、敢えてその共通項を示すなら、「哥之注」と同じく、そのすべてが、いわゆる「うたの心」を重視し、枕詞をはじめとする技巧の解説を丁寧に施し、適宜、伊勢物語本文を注釈の中にとり入れることで、和歌の基本的理解を補助すると共に、物語全体の内容をも、概略ながら、総じて把握しうるに至っている点が挙げられよう。例えば、源氏物語の注釈にも、和歌を中心とするものが伝存するが、このように和歌中心の注釈書というものは、つまり、物語全体にわたって、その難語句に種々の注釈を付す、いわゆる師資相承の中で、

各歌道家の流派に沿って秘伝を授ける、といった姿勢でなされた類とは全く性質を異にするものであり、それら秘伝書とは全く別の次元に属するのではないか。すなわち、主として和歌の初心者を対象とし、和歌の基本的解釈と共に、一般教養、教訓を授けると同時に、伊勢物語の概括的理解も可能にする、言わば、注釈書と梗概書の中間に位置するものになりえていると考えられるのである。

そして、その中でも、「哥之注」においては、和歌に対する鑑識眼を養うような言辭（「よくよく心をつけて見るべし」「おもしろき歌なり」など）が一切加えられず、また、伊勢物語の具体的な成立事情にも一切触れないなど、和歌の初歩的鑑賞の域を出ることのない注釈がなされている点で、以上に述べてきたような、和歌のみの注釈書の特徴を、より明らかに示し出していると言えよう。

前述のように、室町中後期の成立かと思われる「哥之注」であるが、その性格を見ることによって、伊勢物語享受史の中に、このような、秘伝々授とは全く様相を異にする和歌中心の注釈書が存在したことが、明らかに確認されるのではなからうか。

（*1）月樵については、小野恭靖氏「大方家所藏貼交屏風所

収古筆切について（続）」（「日本アジア言語文化研

究」第3号・平成8年3月）に詳しい。

（*2）以下、とりあげる伊勢物語注釈については、原則として片桐洋一先生「伊勢物語の研究・資料篇」の翻刻に拠る。なお、「哥之注」には朱による濁点表記がなされている部分がある。以下、本文引用にあたっては、その表記に従った。島原松平文庫蔵「伊勢物語聞書抄」には、濁点表記は存しない。

（*3）二五段の例については、「さ、わけは袖こそぬれめとね川のいしはふむともいさかはらより」を「本哥」としてとりあげるものである。これは「新勅撰集」所収歌ではあるが、神祇歌であるため、歌自体は、伊勢物語成立以前のものである可能性も存する。しかし、「哥之注」講説者が、当該歌を「新勅撰集」に拠って引用しているのは明らかであると思われる。

なお、本稿は、平成八年十二月七日、大手前女子大学にて行われた、第六十二回和歌文学会関西例会における口頭発表に基づくものです。御教示をいただいた諸先生に御礼申しあげます。

（ふじかわ しょうこ／関西大学院生）